

神奈川文芸賞 [2022]

現代詩部門：準大賞

日々／廣瀬 充

電車が揺られていく  
まだ明け切らない白い朝を  
電車で揺られていく

座席を埋める乗客は  
どこを見つめるでもなく  
俯き加減に ただ揺られていく

駅に止まる  
客は 立ち上がる時に少しだけ 足に力を入れて  
そして すくくと立ち上がる

ああ そろそろ みんな 溜めていたんだ  
ホームに降り立つ活力を  
今日一日を強く踏ん張れるような  
そんな活力を

電車で揺られていく  
陽のさす乗車客はまはらで  
席に座る乗車客はまはらで  
月を仰ぎ見ながら  
どこか上の空で ただ揺られていく

駅に止まる  
客は 立ち上がる時に少しだけ ふーと息を吐いて

流れていった。案内された部屋の扉のむこうには、二つのベッドとおおきなソファ、化粧台と冷蔵庫があった。弟があたりを見まわると思ったが、彼はそうしなかった。ただガラスの窓のしに、ちよちよとあふれる湯を見つめていた。人が少ないうちに弟を大浴場につれていく。そう思っただけで、かけようとしたとき、うしろから母がなにかつぶやいてくる。母は鏡を見ながらほほをこすったあと、私を見て言った。

「すきを見て」

「明日は、晴れるといいね。山原にむかうタクシーのなかで、母が言った。彼女はしばらく窓の外を見ていたが、ふと弟の顔に手をあてた。

「はいね。もう小学生になるんだね。弟は嬉しそうに笑った。タクシーの運転手が、おめでどういいます。と母に言う。うちにも八歳の息子がいます。と、子供は知らぬ間にとんとんおきおきなる。ほんと、と答えた母の顔は運転手にとどいた。うか。母の顔はもうずいぶん悪くなった。すみません、とめてください。やっぱり引きかえしてあげよう。私は何度も言うことになる。でも、そうしなかつた。弟が心地よさそうに母にもたれかかっているのを、ただ横目で見ていた。

タクシーは木々のトンネルを抜けて、広い駐車場で止まった。運転手も二度、おめでどう、と言う。弟は恥ずかしそうにおでこをかいた。砂利を鳴らしながらタクシーが走り去っていく。母は「ちた、と弟の手をひいて歩きた。天気の良いか、人は少なかつた。茶屋の扉には休日の札がかかっていた。私たちはまたまた店の前を通りすぎた。鳥の鳴く声や遠くから聞こえる。あたりの景色はほんやりとくすみ、夢の中を歩いているようだった。うつむいた視界の中で弟が駆けだすのを見たとき、母がほら、と行ってふりかえった。遠くから背中をむこうに、すすきの草原が広がっていた。母はおかしそうに笑っている。それは、私が思い描いていた光景とあまりにちがうものだった。金色にゆれる穂は少しもなかつた。

「ひっくり返した？」母が言った。思っていたのちがうでしょ、とも。地面に残った短いすきはほとんど黒に近い茶色で、それがすくすくついていった。「野焼きをしたのね」

母も景色をながめていた。

「のやき、ってなに？」弟は、また母の手を握って聞いた。

「すきに火をつけて、燃やしてしまうの。悪い虫や雑草も。そしたら、またきれいなすすきの草原になるよ」。しばらく困ったような顔をしていた弟は、しやがみこんですきに顔を近づけると、手のひらでそれをさわった。彼の足元の木材は、焦げてくろくろく炭のようになっていた。

「知ってたの？」すきをなでる弟を見ながら、私はたずねる。

「うん。ほかの患者さんが話して」

「焼けどにある白い道を、はしまで歩こう、と母は言った。立ちもまわって遠くをながめたり、うすくまわって砂をむく弟と、私たちは道を進んだ。行きどまりになってふりかえったとき、つづみ山の上のところに、青い空が少しだけ見えた。「写真を撮ろう」と私は二人に呼びかけた。わたしはいいよ、と母は取り合わない。私はこちらにヒースサインをむける弟の奥に、母の横顔を少しうつらした。

「八年前は来なかつたね、」。引きかえしてきた道がおわるとき、私は言った。母はうつろいでこちらを見る。私がすきに驚いたときと、同じ顔で笑った。

「あなたたちは、私を入学式に出したがるのね」

あなたたち、というのは私と父のことだ。私が中学生になった日、母は、私の母になった。「だつてやっぱり、母親に見てほしいと思っただけじゃない」私が言う。そういつものなかな、と母はつづみ山に宿に戻ると、母は横になってしまった。窓には私

と弟の顔がぼんやりとつづる。

「ゆり、お風呂に行こうか」

弟が私の顔を見つめた。

「お風呂はいつでも入れるから。ご飯を食べたらまた行こう。そう言つて、弟はうつろした。自分で持つていってきかない弟に、ふかふかしたバスタオルを渡す。彼はにおきすぎるスリッパを引くすりながら、廊下を歩きた。風呂にむかひながら、弟は疲れたようにも見えずに、あれはなに？、これは？、とすきに話しかけてきた。脱衣所で服を脱がせてやる。裸の大人たちがおかしいのか、くっくっくとしてる。私はすべらないでね、と声をかけて湯気でもするガラス戸を開けた。食事のせいかな人多く、三つある内風呂は満員だった。弟と自分のからだを流しながら、私は何度も、息をついてね、と言った。弟の首はほんのりと染まっていた。

露天風呂に入ろうと外へ出る。湯気がおきく立ちのぼっていた。寒さを感じる。弟は、湯につかると、こぼれその熱さからだをさるわせた。にじんだ湯がこぼれては流れていった。胸元やひざをつるりと光らせた女たちは、むきだしに岩にもたれかかると、それぞれの景色を見ていた。一人が立って湯を掻き分けると、ほかの女はゆらゆらとゆれた。また一人が入ってきて、私と弟をゆらした。ふと見ると、弟は耳まで真っ赤になっていた。流れる汗で生え際の傷が濡れている。私は、まじめな顔をして湯につかる弟がおかしうて笑った。弟は不思議そうな顔ををした。

「熱いよね、あがるか。私が言つて、彼はうつろ、うつろした。からだを拭いてやると、弟はすなおに腕をあげた。私はその頭にタオルをかぶせて、こしこし拭いた。

部屋に戻ると、そこに母の姿はなかつた。私は弟を残し、少し迷ったあとドアの鍵をかける。廊下を引かかえしていると、顔から汗がこぼれた。私はエレベーターのボタンを何度も押した。

「お姉さまでしたら、たったいま外へ出られましたよ。ロビーに飛びだした私に、スタッフが言った。自動扉のすきまから外へ出ると、そこにたばこを吸う母がいた。

「あら、かい」

母の顔は悲しいほどに赤らんでいて、私はさうと目をそらした。疲れたんじゃない？、と、顔をそむけたままたずねる。返事がないので母を見ると、彼女は上着に顔をうずめていた。それを見た私は泣きそうになってしまった。大丈夫？、とも一度たずねたとき、母が顔をあげた。その瞳には、あかりがさくらさくらとつづっていた。

「ゆりが心配するから、戻ろう。そう言つて、母は宿に入っていく。深い森がどこまでもつづいていた。夜の山は黒く、遠くは少し薄く黒になっていた。

弟はペットボトルの水を飲みながら、テレビの前ですわっていた。そんなふうで待つ姿は、母が入院してから、私が毎日目にしてきたものだ。

「ゆり、ご飯を食べに行こう。浴衣に腕を通しながら、母が言った。テレビの前のソファのへばりは、汗で丸く濡れていた。

にぎやかな夕食会場のテーブルには、つぎつぎと料理が運ばれてきた。たけのこ、なほな、ほたるいか。そろそろ、こみ、さくらえび。給仕係がひとつひとつ説明をした。目の前の二人は、色とりどりのご馳走にほとんど手を触れない。私はうつろいながら、弟は足でつまみながら、弟がソフトクリームを二つも食べていたことを思い出した。ふつと湧く奇世鍋は、少し掻き混ぜられただけで、おどは湯気をテーブルの上を広げただけだ。

「お風呂は、やめておくれ。部屋に戻った母は、そう言つたまま横になってしまった。私は部屋にあるシャワーで弟のからだを洗い、よく乾かして、子供用の浴衣を着せてやる。きれいに結んだ帯を見て、弟は恥ずかしそうにした。そんなふうで、弟に服を着せたりなにかを食べさせるとき、私はいつも安堵した。彼の世話をしているときだけ、私は満たされるのだ。

「ほう、ゆりさんに見せてあげて」。私は静かに言った。弟はすなおに母のとうへ行き、ぎこちなく浴衣の袖を広げた。母はちいさく微笑んで、横になつたまま弟の手を伸ばす。つやつやしたほほを母の指が優しくくつねた。

私は布団に入り、弟を呼んだ。明かりを消すと、重たいからだに暗闇が覆いかぶさった。

寒さを感じて目を開けると、弟の頭だけが布団からのぞいていた。私は横になつたまま外のほうを見る。開いた窓のすきまにはほほまようにして、母がすわっていた。私は音をたてないように母に近づいた。

「眠れないの？」そつたずねると、うん、とかなんか母が言った。母のむきだしになった二の腕は汗で濡れていた。柵の外は木々が生い茂り、その葉がときどき雨に打たれている。白い幹がくつきり浮かびあがり、そのむこうがわに見えるものはなにもなかつた。母の苦しそうな息の音が聞こえた。

「体調、悪いの？」私はもう一度聞いてしまつた。

「はい、と母はむきだした顔をうめたまま言った。母は肩を息をしながら顔をあげた。冷たい風がからだを信じられないほどの汗をかいている。それなのに、母はおたやかな顔をしていた。まるでぼんやりと考

え、とをしているような顔だった。

「私のせいだ、ごめんね。そう言つてから私は気づいた。母は自分がこころなことを知つていて、それでもこころにきたのだ。

「あなたのせいじゃない。むしろ感謝してさうらうよ」

私ひとりじゃどうにもならなかつたもの、と母はつづく。そのままだあがる、よめきながら洗面所に入つてしまった。暗闇に一人どりのこぼれも、もう心細さは感じなかつた。山にあふれる生き物の音が、母の苦しそうな声をかき消した。

いつのまにか起きた弟が、ドアの前に立ちつくしていた。私は彼のところに行つて、その肩に手をのせた。弟が、私に顔をよせてなにか言おうとする。

「おかせん、しんじやう？」

弟は私をまっすう見て言った。彼の浴衣にプリントされた草漕から、私は目が離せなななる。

「ゆりさんは、死ななと思つたよ」

弟は、草漕を握りしめてうつろした。ほらもう寝なな、と、言つて私は弟をベッドに戻し、布団をかけた。部屋の壁には、スツとちいさなフレザーが吊るしてあった。

結局母は朝まで洗面所にこもり続け、明るくなる頃にはやつと横になった。私は冷たい窓にもたれて、二つ並んだ布団の山を見ていた。

早朝のホームにはだれもいなかった。母が二回目の途中下車をしたとき、私たちが入れ替りに数人の客が車に乗っていた。フレザーを着て黒のローファーを履いた弟は、ホームのベンチに腰かけている。彼の隣にある紙袋には、箱詰めされた朝食が入っていた。

駅ホームは朝日でもがしいほどだった。やってきました車に乗ると、私はたくさんの荷物を抱えて、母と弟のむかひにする。二人があまりによく似た顔をするので、私は思わず笑つてしまった。母が不思議そうに私を見ていた。

長い時間をかけて最寄りの駅に着くと、そこは見慣れたファミリーワゴンがあった。運転席のドアの横に、腕を組んだ叔母が立っている。足を引くすりながら歩く私たちを見た叔母は、なにか言おうとしたが、それよりも早く母が口を開いた。

「入学式に行つてから」

母は私にむかひて言った。「病院に戻るの、そのあと」

まるで、それ以外は認めない、というふつだった。私は母と弟を後部座席にのせて、ばたん、とドアを閉める。驚いた弟は顔をほつとあげた。

「あの、私はうちに戻ります。荷物もあるのよ」

そう、と言いつつ、叔母はあつとつづみ山に二人を連れていってしまう。去っていくワゴンをながめながら、こみあげてくるのが、後悔なのか寂しさなのかはわからなかつた。

家に着くと、私は荷物を放りだして、玄関にすわりこむ。足は痛み、髪の毛は安いシャンプーのせいできしきしてしまつた。リビングのつづみ山に、昨日の朝思われてしまつたのか、弟の帽子が落ちていた。私はそれを拾おうとして、手を伸ばした。帽子を持つたまま横になり、天井をながめていた。帽子、まぶたが重くなつていく。隣の住民がドアを開める音が、遠くで聞こえた。

はつと目を覚ましたとき、部屋のなかはずつかり暗くなつていった。からだがかげぼり、からっぽの胃は苦しいほどだった。声をあげて起きあがりながら笑つてしまつた。私は靴すら脱いでいなかった。荷物を運んで部屋の明かりをつけ、叔母からのメッセージを開いた。そこには、入学式のあと、母を病院へ送つたこと、弟を叔母の家へ連れ帰つたことが書かれていた。洗濯機をまわしながら、私は宿のバルコニーから見た夜のことを思い出した。深い山はいろいろな音であふれ、いつまでも静かになることにはなかつた。明るくなると、夜を乗りこえたちいさな生き物たちが、次第にその声をあげて鳴いていた。

私は紙袋から箱に入った朝食をとりだして、三つともテーブルに広げた。ご飯はかたくなり、練り物やたまごやきはしなびてしまつていた。私は割り箸で、おかせを口へ運んだ。途中でお腹が苦しくなつたが、それでもせつせつと食べ続けた。私は時間をかけて、母と弟の分までほとんど食べへへしてしまつた。冷めてかたくなつてしまつても、丁寧な作られた料理は優しい味がした。それは、三人でかこんだ湯気のたつと馳走よりも、きちんと私のからだになつていくふつだった。弟は叔母の家で夕食を食べたんだろか。

いつだったか、私が弟に「ご飯を食べさせているのを、母が見ていたことがある。父が家を出たあと、弟の世話をしているのは私の役目だった。

「ゆり、あなたのこと好きね」

母はそう言つていた。私はその言葉で頭の中で何度もくりかえした。たしかに弟は私のことが好きだ。た。いつも私の名前を呼び、私の顔をのぞきこんだ。ただ、弟を必要としていたのは私のほうだった。弟が、母の言葉にすぎなる私を優しい人間にしてくれた。スマートフォンが鳴り、母から二枚の写真が送られてくる。開いてみると、そこには弟がうつろっていた。大勢の参列者のむこうに、今朝見送つたちいさなフレザーの姿があった。もう一枚は、小学校の校門で撮られたものだった。まじめな顔をしている弟の髪は、すっかりなでつけられている。私はしばらく弟の顔をながめていたが、その写真は保存せずにスマートフォンを置いた。窓を開け放すと、外は箱根下りすつとあたたかく、ずつと静かだった。

作品掲載に当たっては、原文通りを原則としていますが、入賞作品は順次掲載します。

次回は11月の予定

講評

蜂飼耳

朝晩の電車による通勤・通学の情景が、鋭くも優しい視線のもとに切り取られている。駅に停車したとき、乗客は少しだけ「足に力を入れ」たり「ふーと息を吐い」たりして立ち上がる。そう言われると、確かにそうだ、と作者の観察に納得させられた。一日の始まりと終わりに人々を包む空気感がありありと浮かぶ。最後の連では「電車で揺られていく」ことと生きていくことそのものが、びたりと重なって、さりげない余韻に繋がる。

講評

朝井リョウ

まず、私の手元に届いた最終候補作の中で、この小説と似た空気感のもの一つもありませんでした。非常に絶妙な緊張感が物語全体を貫いていて、その時点で既に誰にも奪われないオリジナリティを獲得している小説だと感じました。随所随所で、まるで誰にも気づかれない落とし物のように、少し気になる描写が差し込まれます。それらは最後まで完全に解明されることがありませんが、不思議と、解明をモチベーションとせずとも読み進められる魅力がこの小説にはあります。解明に代表される気持ちよさに頼らず読者を導くというのは、それを成立させる文章力があってこそです。著者は既に、どんな場面でも自分の温度感に染めてしまえる筆致を手に入れている気がします。それは今の私が何より欲しいもので、羨ましく感じます。